

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18760480
 研究課題名 (和文) 20 世紀国民国家形成期以降のトルコにみられるオスマン風モスクの意味
 研究課題名 (英文) Meanings of Ottoman imitation for modern Turkish mosques after the formative period of nation-state
 研究代表者
 山下 王世 (Yamashita Kimiyo)
 東京外国語大学・大学院地域文化研究科・助教
 研究者番号：50418670

研究成果の概要：

本研究は、トルコ共和国(1923-)の現代モスクにオスマン風デザインが多用される様々な背景について考察を行った。オスマン風デザインはイスラームを連想させるデザインとして、敬虔な宗教層に支持される傾向にある。ただし全てのオスマン風デザインの事例がイスラームを連想させようと意識的に用いられているとまでは言えず、この問題に対する学界や建築家の消極的な姿勢や、モスク建設特有の限られた資金事情とも深く関係している。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	700,000	0	700,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	0	2,900,000

研究分野：イスラーム建築史

科研費の分科・細目：建築学 建築史・意匠

キーワード：トルコ、モスク、コジャテペ

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで主としてオスマン時代 (1299-1922) におけるモスクの空間構成、ドーム構造の変遷に着目して研究を行ってきたが、本研究プロジェクトでは、これまでの知見を生かして現代モスクの研究を試みた。なぜなら特にトルコ共和国では、現在でも現代工法によって建設されたモスクにオスマン様式が多用されており、オスマン時代から現代へと時代を通じた考察が不可欠と考えたからである。

研究の背景は次のとおりである。

- (1) トルコ共和国が建国されると近代化政策の一環として、法体系から教育、服装や文字に至る諸分野で脱イスラーム政策がとられ、建築分野でも西洋建築が奨励された。しかしとりわけ 1950 年代以降、現代モスクに過去のイスラーム様式である「オスマン風」デザインの適用が好まれ、現在も多用されている。
- (2) 学界ではオスマン風モスクを模倣と批判するだけであり、その建設背景などに至る本格的な研究はなされてきたとはいえ

ない。

そこで研究代表者はトルコの「オスマン風」モスクを研究対象とし、批判されてもなお建設され続ける理由を明らかにすべく、本研究プロジェクトを開始した。

尚、本研究では、伝統的工法でオスマン時代に建設されたモスクを「オスマン様式モスク」と表現する一方、現代工法によって建設されたオスマン様式の外観をもつモスクのことを「オスマン風モスク」と呼んでいる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、トルコにおいて「オスマン風モスク」が現在も尚、建設され続ける理由を、トルコ固有の歴史的・宗教的背景、モスク建設をめぐる環境や社会的背景と照らし合わせることによって明らかにすることである。

従って第一に、オスマン風モスク建設に関わっている、宗務庁、宗務ワクフ、一般信者、学界、建築家がオスマン風モスクをどのようにとらえているのかについて明確にすることを試みた。それと同時に、オスマン風モスクがゲジェコンドゥと呼ばれる不法占拠住宅が集中するエリアに建設されることが多いことから、ゲジェコンドゥ問題とオスマン風モスクの関連についても考察を行った。

第二に、モスクのデザイン変更（現代的デザインからオスマン風デザインへ）が世論の高まりによって実現した、コジャテペ・モスクについて、デザイン変更の経緯と同時期の社会的背景について先行研究で見落とされている視点を指摘し、検証を行った。

3. 研究の方法

本研究では、(1)関係者からの聞き取り調査、(2)モスクや周辺地区の目視調査、(3)図書館での史資料調査、以上の3つの手法を用いた。

(1)聞き取り調査

トルコ宗務庁では、モスク建設数の集計担当官、モスク設計局担当官、宗務ワクフではモスク建設部担当官、コジャテペ・モスクに関しては同モスク建設協会元委員、建築家ヒュスレヴ・タイラ氏、ゲジェコンドゥ・エリアのオスマン風モスクについては各建設協会委員、信者、イマーム（宗教関係者）から聞き取り調査を行った。

(2)トルコにおける現代モスクの目視調査

アンカラ最大のオスマン風モスク（コジャテペ・モスク）、ゲジェコンドゥ・エリアのオスマン風モスク群、現代的デザインのモスク

（トルコ大国民議会モスク）を目視調査。さらにゲジェコンドゥ地区に建設されたオスマン風モスクと周辺街区の状況についても目視調査を行った。

(3)史資料調査

アタテュルク図書館、国立ベヤズト図書館にて、コジャテペ・モスクのデザイン変更が1面記事として扱われた1960年代を中心に当時の新聞記事、そして同時期に発刊されていた建築関連の諸雑誌に掲載されたコジャテペ・モスク建設に関連する批評論文の収集・精査を行った。

4. 研究成果

本研究の主な成果は、(1)オスマン風モスクが量産されるメカニズムの解明、(2)コジャテペ・モスクのデザイン変更の経緯、という大きく2つに分けられる。以下に内容を記し、最後に(3)として得られた知見の位置づけについて報告する。

(1)オスマン風モスクが量産されるメカニズムの解明

①宗務庁の役割

トルコ共和国は世俗国家であるが、宗教に関することを扱う国の組織、宗務庁が存在する。トルコにおける政教分離の考え方は、国家と宗教を分離するのではなく、国家が宗教を管理する点にあることが特徴的である。ここでは宗務庁がモスク建設をどのように管理しているのか、さらにはそのスタイルについてどのような見解をもって国民の宗教観に関与しているのかについて、宗務庁に赴き聞き取り調査を行った。

聞き取り調査の結果、宗務庁からはなんらはっきりした方針は示されなかった。モスク建設は信者の寄付による自主的な行為であり、モスク建設およびそのスタイルについては信者の主体性に任せているという回答だった。

しかしその一方で宗務庁は近年、オスマン風モスクを容認する少数派の建築家を招集し、モスクのデザインについて非公開の研究会を進めている。召集されている建築家がオスマン風容認派であることから、宗務庁の姿勢が伝統様式に向いていることは明らかのようにも見える。しかしそれでも尚、宗務庁はモスクの形について宗務庁としての見解はないと主張した。つまり宗務庁は国内信者の動きを先導するのではなく、見守る立場にあり、モスクのスタイルについても積極的関与はしないことに留意している。従って巷にあふれる「オスマン風」デザインは、信者の自主的な建設活動の中から出てきたもので

あり、宗務庁は何ら関与していないというのが宗務庁の主張であった。

②宗務ワクフ（財団）

宗務庁は国家省庁のうちの一組織であるのに対し、宗務庁の外郭団体で国家組織ではない宗務ワクフでは、役人的な遠まわしな回答ではなく、理想とするモスク像について明快な答えを得ることが出来た。聞き取り調査から、宗務ワクフがモスクを建設しようとする人々に助言業務を行っており、その一環として、小規模モスク用に小屋組み式モスク、そして中規模以上のモスク用にオスマン風モスクの設計図面例を無償提供しているという重要な情報を得ることが出来た。信者はこれを持ち帰り、自分たちの建設用地の形態や規模に適したかたちで若干の変更を加えてモスクを建設するという。この図面配布活動は、とりわけ中規模以上のモスクにオスマン風デザインの事例を増加させる直接的な原因といえるだろう。そして同時にモスクデザインの多様化の可能性を阻み、モスクといえばオスマン風という固定観念を植え付ける行為と位置付けられる。（無償配布されている設計図面は参考資料として提供していただいた）

③一般信者

現代トルコ社会においてモスク建設は、一般信者から集められた寄付金で実現される。そのため一般信者の意向もまた、モスクのデザインに影響を及ぼす。一般信者が自分の住む街区に立派なモスクを建設したいと思うのは当然のことである。オスマン風モスクを建設した経験をもつ建設協会の関係者から聞き取り調査を行ったところ、関係者の多くがオスマン朝モスクのモニュメンタル性に対する単純な憧れから、オスマン風を嗜好する傾向にあることが分かった。彼らは皆、胸をはって、オスマン風デザインで建設された自分たちのモスクの美しさを説明してくれた。オスマン様式を超えるモニュメンタルな現代的デザインのモスクが存在しない状況では、一般信者の人々がオスマン様式のモスクにあこがれをもつのは自然のことといえるだろう。

⑤学界

学界では、オスマン風モスクは悪質な模倣建築として繰り返し批判されている。図書館での史料調査から、こういった批判記事が1940年代頃から建築雑誌を中心に繰り返し掲載されていることが分かった。大学研究者や大卒の建築家にとっては、オスマン風モスクは模倣建築であり、実際のオスマン様式の均整美を無視して建設される、低品質かつ建築的価値の低い建築である。そのためオスマ

ン風デザインは手厳しく批判されたのだった。しかし調査をする中でもう1点、明らかになった事は、批判された後に何か具体的な防止策がとられた訳ではなく、無視され、放置されてきたという状況である。

⑥建築家

学界は批判をするだけで具体的な対策を取らなかったため、1950年代以降、オスマン風モスク数は増加し続けた。ここで生じる疑問は、誰がオスマン風モスクを建設し続けているのか、という問題である。当然のことながら一握りのオスマン風モスク容認派の建築家は存在する。しかし彼らはオスマン風モスクを設計したことで、学界から手厳しい批判を受け、その釈明に追われる中、モスク建設を手控えるようになる。この風潮の中でモスク建設は批判を受けやすい面倒な仕事という意識が広がり、それまでモスク建設をしたことのない建築家もモスク建設事業の受注を避けるようになったことが先行研究の中でも指摘されている。

それにも関わらずオスマン風モスクが増え続けることができたのは、職人層がモスク建設を担ったからである。実際、研究代表者がサンプル調査の対象とした、イスタンブール広域市の代表的なゲジェコンドゥ・エリアであるキャウトハーネ区のギュルセル街区のオスマン風モスクは全て、職人の手によるものだった。トルコでは職人には建築家ライセンスは与えられない。つまりこれらの職人の手によるモスクは不法に建設されていることになる。

⑦ゲジェコンドゥ（不法占拠住宅）

トルコ大都市の周辺には、ゲジェコンドゥ（直訳すると一夜住宅。実際には一夜で建設されるわけではないが、国有地に不法に建設された住宅を指す）がひしめいている。オスマン風モスクは様々なところに建設されるが、ゲジェコンドゥ・エリアには多くの事例を見ることができる。ゲジェコンドゥの発生は、1950年代に農村で機械化が進み余剰農民が仕事を求めて大都市に流れ込んだが、政府が適切な住宅政策を進められなかったために起こった現象である。都市へ流入してきた人々はたくましくも国有地に自力で住宅を建設し、都市で仕事を得て、街区を形成していった。

ゲジェコンドゥ・エリアにあるモスクの関係者を対象に聞き取り調査を行ったところ、流入民達は自分の住み家を確保し、生活が落ち着いて来ると、自分の街区にモスクを建設しようと動き出すという。そしてこうして建設されたモスクは周辺の住宅と同様に不法建築であり、ライセンスをもった正規の建築家ではなく、職人の手によって建設されると

ということが関係者の証言から明らかになった。

さらにこの状況に関して宗務ワクフのモスク建設局の担当官（建築家）に意見を求めたところ、この状況は、現代モスクが人々の寄付という限られた資金源で建設される状況とも関わりがあるという指摘を受けた。つまり、モスク建設は人々の善意により寄付で実施されるため、潤沢な資金があることは稀であり、多くの場合、資金難の中でモスク建設が進められる。実際、トルコの街中には、建設途中のモスクの一部で礼拝が行われている光景は珍しくない。これは建設途中で資金が枯渇してしまったため、とりあえず一部を礼拝に公開し、寄付を集めながら、建設作業も進めていくという状況にあることを示している。多くのモスクがこのような資金難にあるため、経費のかかる建築家にモスクの設計を依頼することが事実上無理であり、そういった人々が宗務ワクフでオスマン風モスクの図面例の提供を受け、安易にそれを利用して職人に建設を依頼する構図が成り立っているというのである。

⑧まとめ

以上のトルコ特有の諸事情から分かってきたことは、オスマン風デザインはイスラーム的デザインとして宗務庁、宗務ワクフ、敬虔な一般信者に好まれる傾向にあるものの、オスマン風デザインが増加していくのはそれだけが理由ではない、ということである。モスク建設を推進する信者たちが抱える資金難が、建築家ではなく職人が建設工事を受注する違法な構造を助長していることは確実である。加えてこれらの受注の主体となる職人層には、オスマン風モスクに関する学界での議論に触れられる機会はなく、よって学界の見解がモスク建設現場に反映されるはずもないのである。こういった悪循環はオスマン風モスク建設が続く一因である。従ってオスマン風モスクが増えているからといって、宗教的なシンボリズムの継続を望む声が増大しているとは必ずしも言えないのである。

学界がオスマン風デザインの改善を本当に望むのであれば、学界で議論されていることが一部の知識人のみの間にとどまるのではなく、実際にモスクを建設する信者にも還元されなければならない。そもそも学界が建築家ライセンスを持っていない職人層のモスク建設を黙って見過ごしていることも、地震時に強度不足と見られる倒壊がとりわけ現代モスクに多いという事実が存在することからも倫理的に許されることではない。しかし現実としては、学界による具体的な解決案は提案されていない。従ってこうした学界の姿勢もオスマン風デザインのモスク増加

を助長しているといえるのである。

(2) コジャテペ・モスクのデザイン変更の経緯

首都アンカラ最大規模のオスマン風モスクであるコジャテペ・モスクは、着工時は現代的なデザインであったが、建設途中でオスマン風デザインへ変更された経緯をもち、オスマン風デザインがなぜ選ばれたのかを考察するには格好の研究対象といえる。既に完成していた建築基礎をダイナマイト破壊するまでしてオスマン風デザインへ建設し直した経緯を考慮すれば、このデザイン変更にはかなり大きなエネルギーと明確な理由があったはずである。そこで本研究では、このモスクがオスマン風デザインに変更された経緯と当時の社会的背景について考察を行った。それによって以下の新たな知見を得ることができた。

① 先行研究で見落とされている点

コジャテペ・モスクのデザイン変更に関する先行研究は、西洋的な教育を受け、イスラームとは一定の距離をもつ研究者・建築家等によって積み重ねられてきた。先行研究で大勢を占める視点は、コジャテペ・モスクのデザインが現代的で斬新であったために、イスラームを重視する政治家と宗教勢力により不当に変更を強いられたという見方である。こういった見方をする研究者にとってオスマン風モスクは、イスラーム再興のシンボルである。確かにオスマン風モスク支持者は保守的な思想をもつが、それがすなわちイスラーム体制の復活を主張することにつながるという見方は行き過ぎではなからうか。

これを検証するために、コジャテペ・モスクのデザイン変更に至るまでの議論の経緯を当時の新聞記事から洗い出してみた。すると先行研究では触れられてこなかった一面が見えてきた。それはコジャテペ・モスクの最初の設計案を担当した建築家ダロカイの失言である。ダロカイは当時、世間を騒がせていたアヤソフィア問題に関連してイスラームを冒瀆するような発言をし、保守層に激しい反感を買った。そしてこのような不信心者がアンカラ最大のモスクを建設するのはふさわしくないという意見に発展し、建築契約が破棄されるに至ったということが一連の新聞記事からは読み取れるのである。

② 建築家ダロカイの失言がデザイン変更に関与した影響

コジャテペ・モスクのデザイン変更の議論が起こる前、トルコ国内はキプロス問題によりギリシアとの関係が悪化していた。さらに1967年に保守政党が政権を取ったことから、

アヤソフィア博物館をモスクに戻そうとする社会運動が敬虔な人々を中心に起こっていた。この騒動の最中にダロカイは、アヤソフィアをモスクへ戻そうとする人々を批判した。ダロカイは、アヤソフィアがビザンツ帝国最大の教会堂建築として6世紀に建造され、オスマン時代にはモスクとして使用された経緯をもつため、この建築を世界の遺産と位置付け、トルコ人だけのものでないと主張した。ダロカイの主張は国際関係を意識するインテリ層にとってはもっともなものであった。しかし国内の敬虔な人々にとっては、モスクに戻すことに反対するダロカイの姿勢はすなわちイスラームへの冒瀆を意味し、さらにはギリシアやキリスト教文化を擁護する発言と理解された。ダロカイはたちまち国賊と非難され、当時担当していたコジャテペ・モスクの設計者から外されてしまった。当時の新聞記事からはこのような経緯が読み取れるのであるが、奇妙なことに先行研究ではこれらのことに全く触れられていない。これは先行研究がダロカイ側の立場にある研究者によって書かれているため、ダロカイ擁護の立場を反映しているものと考えられる。

③まとめ

以上のように本研究によって、先行研究では触れられていない一面があることが分かった。コジャテペ・モスクのデザイン変更の背景にダロカイの失言があったということはデザイン変更という事象に異なる意味合いを加える。すなわち、コジャテペ・モスクのデザイン変更は、不信心者のダロカイが設計者であったために変更されたという一面を否定できないのであり、現代的なデザインそのものへの反発だけで変更されたとは言いきれないのではなからうか。実際、ダロカイ批判を行ったテルジュマン紙の紙面では、全国各地の新設モスクを紹介するシリーズ記事があるが、日によっては現代的で斬新なデザインのモスクが肯定的に紹介されている。つまり反発の矛先は斬新なデザインではなく、ダロカイという建築家に向けられていたといえるのではないだろうか。

次にコジャテペ・モスクのデザイン変更がトルコ社会に与えた影響について述べる。ダロカイの失言からコジャテペ・モスクのデザイン変更に発展する過程は保守系新聞の一面で議論されたため、敬虔な人々に伝統的デザインに回帰させ、新しいデザインへの冒険を躊躇させる一因となったといえよう。建築家は西洋的な教育を受け、イスラームに執着した考え方をしない場合が多いが、すべてがダロカイのようなケマリストであるわけではない。それにも関わらずこの事件が、ケマリ

スト建築家とイスラームを大切に思う人々という対立の構図を強調してしまった。この対立構図が現代モスクのデザインに停滞をもたらしたことは明らかである。

ケマル（アタテュルク）は1920～30年代に諸分野で改革を行い、建築分野においても西洋化を推進したが、そこで放置された分野が宗教建築だった。すなわち、ケマルの時代にモスクデザインの近代化の規範は示されなかったのである。

その意味で、1950年代のメンデレス政権下にアンカラに大規模モスク建設の気運が高まったことは、新生トルコ共和国のモスクはどうあるべきかを議論し、方向性を見つける上で絶好のチャンスだったといえるだろう。しかしながら結果としてはダロカイと宗教層との対立という構図が深まることになり、宗教層に保守的なデザインに回帰させるきっかけをつくってしまった。このことが20世紀後半のトルコのモスクにひとつの方向性を与えたことは確かであり、現在もオスマン風モスクは増え続けている。学界はこれを批判しているが、宗教ワクフは淡々とモスクの規範図面としてオスマン風モスクの設計図を配布し続けている。もしコジャテペ・モスクのデザインがトルコ社会の対立の構図の中から二者択一で決められるのではなく、両者の妥協と話し合いの中から生まれてきたのであれば、その後の現代モスクにもう少し多様なデザインが生まれる可能性をもたらしたのかもしれない。しかし実際は、このチャンスを生かせなかったのである。

(3) 得られた知見の位置づけと今後の展望

日本国内においては、2000年に東京・代々木上原に東京モスクが建設されたが、これはいわゆるオスマン風モスクである。この作品が日本建築学会の2002年度作品選集に選ばれた際、審査員はこのモスクが単なるレプリカではないかという疑問に対して、「そもそもトルコにおける現代建築の状況を理解していない限り、この建物の出来さえ不明になる」と講評している。トルコの現代モスクに関して日本語で書かれた本格的な論考はこれまで出ておらず、本研究が初めての試みである。そのため『日本建築学会計画系論文集』への投稿論文のみならず、設計活動をする建築家の目にもとまりやすい、日本建築学会月刊誌『建築雑誌』2009年2月号において本研究の成果の一部を公表できたことは非常に有意義であったと思う。今後、本研究で得られた知見は、東京モスクをはじめとする日本のモスク建築に対する理解の深化に貢献すべく、成果の公表に留意していきたいと思う。

本プロジェクトは建築史研究者による個人研究であったが、今後は学際的研究の必要性を感じている。研究代表者が日本中東学会

で口頭発表を行った際、社会人類学、社会学、トルコ現代史など、建築史以外の様々な分野の研究者から関心を寄せていただき、有意義な助言をいただいた。さらに日本建築学会大会では、近現代アジアや日本における現代宗教建築研究者と意見交換することができ、そこから気付かされたことも多かった。加えてトルコ国内においても、とくに社会人類学分野の若手研究者がコジャテペ・モスク周辺の街区の特殊性について2009年7月にシンポジウムを催すなど、研究成果が出始めており、今後益々、他分野との意見交換や交流が有益となるだろう。

従って本研究で得られた知見は、研究期間が終了したからといって終わりにするのではなく、今後も学際的交流を続けていく。研究代表者は本研究で得られた知見を2010年にトルコで行われる国際会議で発表するべく準備を進めている。その一方で、得られた知見を著書としてまとめるべく、鋭意作業中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 山下王世、「特集 宗教建築は終わったのか、IV キリストとイスラーム 東京モスクと現代トルコのモスク事情」、『建築雑誌』2月号、Vol. 124、No. 1586、p. 18、2009年、査読無
- ② 山下王世、「トルコ共和国首都アンカラの象徴：モスク、それともヒッタイト?」、『地中海学会月報』12月号 No. 315、p. 4、2008年、査読無
- ③ 山下王世、「トルコ共和国のモスクデザインにみられる諸課題」、『日本建築学会計画系論文集』第73巻、第626号、pp. 859-866、2008年4月、査読有
- ④ 山下王世、「アンカラにおけるコジャテペ・モスクのデザイン変更について」、『ヘレニズム～イスラーム考古学研究』vol. 13, pp. 108-113、2006年、査読無

[学会発表] (計3件)

- ① Yamashita Kimiyo, "GIS and the Study of Ottoman Water Supplies", XI International Congress of Social and Economic History of Turkey, 於：ビルケント大学(トルコ)、2008年6月17日
- ② 山下王世、「コジャテペ・モスク建設の文化的背景—「アヤソフィア論争」の影響」、日本中東学会大会、於：千葉大学、2008年5月25日
- ③ 山下王世、「コジャテペ・モスク建設の経

緯：1960年代トルコ共和国におけるモスク意匠」、日本建築学会大会、於：神奈川大学、2006年9月8日

[図書] (計1件)

- ① 山下王世、「トルコのモスク—多様な歴史に織りなされた建築の空間美—」、『トルコとは何か』、別冊 環⑭、分担執筆、pp. 112-125、2008年5月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山下王世 (Yamashita Kimiyo)
東京外国語大学・大学院地域文化研究科・助教
研究者番号：50418670

(2) 研究分担者

個人研究のため研究分担者なし

以上